



スポーツ庁委託事業
「Specialプロジェクト2020体制整備事業」(第2年次)



平成31年3月
京都市立呉竹総合支援学校
京都市教育委員会

目 次

1. Specialプロジェクト2020体制整備事業の概要について

- (1) Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議体制・・・・・・・・・・1
- (2) 実施校における事業実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2. Specialプロジェクト2020体制整備事業の計画について

- (1) Specialプロジェクト2020 全体年間スケジュール・・・・・・・・・・・・・・3
- (2) 全体的な取組について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
 - ①実施校への指導・助言
 - ②Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議の開催
- (3) 実施校の取組について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
 - ①S・Aプロジェクト
 - ②管理職会
 - ③担当事務
 - ④余暇体験サークル・PTAとの連携
 - ⑤スポーツ・アートの取組
- (4) イベントに向けての取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
 - ①アートパフォーマンス
 - ②スポーツ
 - ③展示
 - ④販売
 - ⑤広報・案内
- (5) イベント当日の準備やスタッフについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
 - ①運営スタッフ
 - ②受付・案内・出入口・駐車等
 - ③アートパフォーマンス等
 - ④展示・販売
 - ⑤設営・物品移動等
 - ⑥保育（PTAスタッフの子どもの見守り・支援等）
 - ⑦主な当日スタッフ一覧

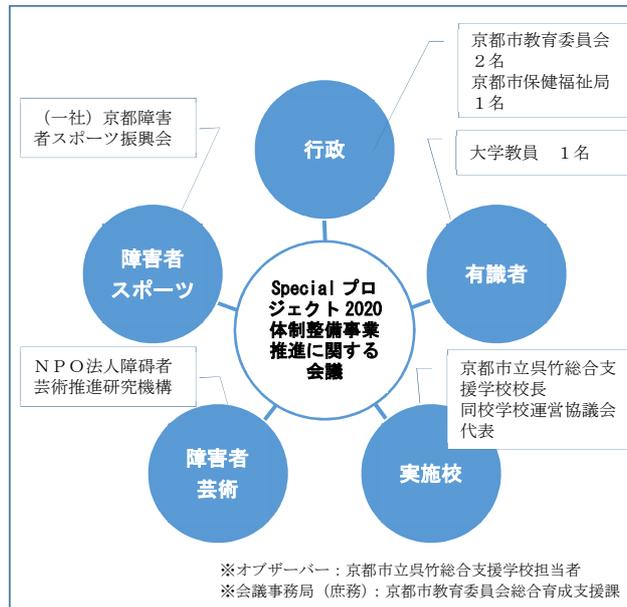
3. Specialプロジェクト2020体制整備事業のまとめについて

- (1) 「くれたけまつり」当日の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
- (2) 「くれたけまつり」参加者（平成29年度・30年度）・・・・・・・・・・・・・・12
- (3) 「くれたけまつり」参加者アンケート（平成29年度・30年度）・・・・・・・・・・13
- (4) 平成30年度のふりかえりと、今後に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

1. Specialプロジェクト2020体制整備事業の

概要について

(1) Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議体制



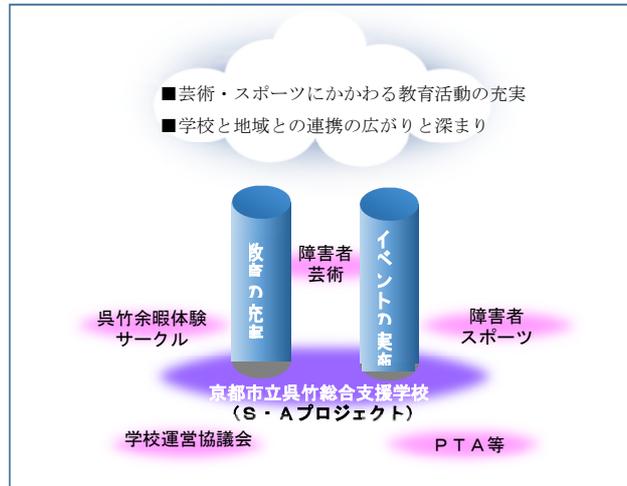
① 目的

2020年の総合支援学校におけるスポーツ・芸術の祭典の開催に向けて、現在の総合支援学校で実施されている運動会・文化祭の情報収集や指導助言、さらには呉竹総合支援学校において実施する実践研究の内容への指導助言及び評価を行なうことを通して、実施体制の構築に向けた検討を行う。

② 取組

実践研究の実施状況・内容への指導助言や評価を実施することを通して、2020年の祭典の実施内容及び実施のために必要な体制整備について検討する。

(2) 実施校における事業実施体制



① 実施体制

実施校が本事業を推進するに当たり、当校の「教育の充実」（芸術・スポーツ活動の充実）と祭典モデルとなる「イベントの実施」を取組の2本柱とした。

本事業を通して教育の充実を図るために校内に「S（スポーツ）・A（アート）プロジェクト」を立ち上げ、障害者芸術や障害者スポーツの専門家の教育活動への指導・助言により教育活動の充実を図った。

※「S・Aプロジェクト」はP4を参照
イベント実施は管理職が、「S・Aプロジェクト」をはじめ上記関係機関等と連携を図り取組を進めた。

② 事業実施の背景

実施校では以下のような背景や特徴がある。

- ・平成20年度から、授業づくりのキーワードとして「興味・関心、才能の伸長」を掲げ、「たのしみ」視点を重視したスポーツ系やアート系授業の充実を図ってきた。
- ・平成18年度から、保護者が学校や地域と連携した「呉竹余暇体験サークル」を運営してきた。
- ・PTAが長年にわたりPTA主催のフェスティバルを年に数回開催し、イベント開催のノウハウを持っている。
- ・平成18年度から学校運営協議会を開催し、地域からの意見や評価を得ながら学校運営をしてきている。

(2) 全体的な取組について

教育委員会の取組

① 実施校への指導・助言

実施計画や現状の課題等について実施校と随時連絡を取り、進捗状況の把握と指導・助言等を行ってきた。

② Specialプロジェクト2020体制整備事業推進に関する会議の開催

推進会議委員は行政（教育委員会・保健福祉局）、有識者、障害者スポーツ関係者、障害者芸術関係者、実施校代表の8名で構成され、教育委員会が主催する年間2回の会議で進捗状況、成果報告を行い、取組に対する助言を行った。

(3) 実施校の取組について

実施校の取組

① S・Aプロジェクト

本事業の企画・運営を行うため、S・Aプロジェクトを立ち上げた。本プロジェクトは教頭、副教頭、各学部代表、部活動代表、余暇体験サークルに関わる教員の代表、スポーツや芸術活動に関わる教員の代表により構成され、必要に応じて年間4回の会議を開催した。会議では日常の取組報告や今後の予定の連絡などを行い、主に取組の具体的な進捗状況の確認や調整を行った。

② 管理職会

担当教頭が日常の取組やイベントの企画の方向性を随時管理職会（校長、教頭2名、事務長、副教頭3名）で報告し、進捗状況を確認した。

③ 担当事務

物品購入に関しては各部署が年度当初に予算要求を行い、購入前には教頭、事務担当者に事前連絡を行い、教育委員会の確認のもと物品を購入した。

④ 余暇体験サークル・PTAとの連携

今回のイベントは余暇体験サークル（保護者主体の学区・地域が連携した運営）がこれまで毎年行ってきた「余暇フェスタ」を基に企画しているため、イベントの企画は余暇体験サークルの運営委員会で随時、進捗状況や今後の予定の確認を行ってきた。

⑤ スポーツ・アートの取組

今回のスポーツ・アートの取組は、イベント当日のパフォーマンスや展示のためだけでなく、児童生徒の興味関心、才能の伸張につながるものとするため、日常の教育活動の充実を目指した。

特に美術関係の授業は日本画家マツダジュンイチ様、ボッチャの授業は（一社）京都障害者スポーツ振興会の三好俊昭様の月1回程度の継続的な指導・助言をいただいた。

(4) イベントに向けての実施校の取組

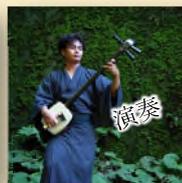
① アートパフォーマンス

8月までに出演者への打診と出演依頼を行い、12月末までにアートパフォーマンスの内容を出演者と共通理解するとともに、今後の課題や検討事項を確認した。演奏とペインティング

セッションでは1月中に itaru 氏と CHI-KA-TSU の打ち合わせと音合せを行った後、その打ち合わせの結果を踏まえてマツダジュンイチ氏と最終の細部の打ち合わせと準備を行った。



画家
マツダジュンイチ氏



現代・津軽三味線
itaru 氏

② スポーツ

ボッチャの授業には三好俊昭氏に月に1回程度ご来校いただき、指導の充実を図った。

指導に来ていただいている三好氏には委託事業決定後にイベントでの指導を依頼し、8月までに障害者スポーツにも取り組んでいる授業を基にボッチャ以外の「障害者スポーツ体験」の種目を決定した。



③ 展示

美術の授業にはマツダジュンイチ氏に月に1回程度ご来校いただき、指導の充実を図った。マツダ氏に来ていただいたときに校内の作品を見ていただき、質の高い作品を見出していただくとともに作品の見方についてご教示いただいた。それらの助言を基に作品の解説を含む展示パネルを作成し、より深い鑑賞ができるように工夫した。



④ 販売

イベントの大綱が決定した後、9月には地域の約50か所の障害者福祉事業所にイベントの出店希望調査（販売依頼文を送付し、出店の有無を確認）を行い、10月に出店事業所を決定した。

11月にはチラシのアピール文等の確認、販売物品の確認を行い、2月初旬には当日の動き（搬出入・販売用備品の確認等）等を出店事業所に連絡した。



⑤ 広報・案内

12月中旬までに福祉事業所にチラシを16,000枚、ポスターを300枚発注した。配布部数は以下の通りとした。

1月初旬に案内・チラシ・ポスター配布をした。校内・余暇体験サークルには昼食（PTA販売の弁当・おにぎり・弁当・お茶）と駐車の手配を受けた。



配布先	チラシ配布備考	チラシ枚数	ポスター枚数
総合支援学校（8校）	各校児童生徒数+10枚程度	1,100	10
地域	伏見社会福祉協議会より23学区へ	500	30
	高等部生徒による地域各戸配布	500	0
	伏見・南区役所に設置	1,000	5
	近隣の小中学校19校の全児童生徒	10,000	25
	通学区域内28校の小中学校育成学級児童生徒+数枚程度	500	30
福祉事業所	本校利用の放課後デイサービス事業所、本校生徒の進路先の事業所110か所	2,200	150
その他	余暇体験サークル、市教委ほか	200	50
合計		16,000	300

（5）イベント当日の準備やスタッフについて

① 運営スタッフ

前日は教職員が会場等の準備を行い、当日は教職員ボランティア、PTAボランティアともに約40名、おやじの会ボランティアが10名、学生ボランティアが4名、中高生ボランティアが3名、スタッフとして約100名が各担当を担った。

スタッフの十分な打ち合わせはできないため、前日までに細かなタイムスケジュールや役割の留意点を記載した書類を配布し、当日はチーフとなる管理職や所属の責任者10名程度で、その後、各担当で必要に応じて打ち合わせを行った。

③ アートパフォーマンス等

前年度は発表をすべて体育館で行ったため、発表の前半で多くの人が校舎内の展示や販売に人が流れて、多くの人にアートパフォーマンスを見ていただけなかった。今年度はアートパフォーマンスを前半（校舎内）と後半（体育館）に分け、ストリートライブに近い形態で行った。舞台上での発表ではないため、発表場所に大きめのモニターを設置し、スタッフが撮影するライブ映像を流すことで多くの人に楽しんでいただけるようにした。



高等部の「呉竹ソーラン」や余暇体験サークルの発表は担当の教職員や所属の保護者がスタッフとして準備や指導を行った。

④ 展示・販売

実施校では「くれたけアートギャラリー」として児童生徒の作品を常時額装展示している。当日、それらの作品とともに作品の解説を加えたアートパネル11点を展示した。また制作風景の紹介動画も鑑賞できるようにモニターを廊下に設置した。

優れた感性や表現力を楽しんでいただけるよう、作品は在校生だけでなく卒業生の多くが所属している特定非営利活動法人 障害者芸術推進研究機構「天才アート KYOTO」からも展示していただいた。呉竹余暇体験サークルの写真サークルからも16点を展示し、絵画や造形だけでなく幅広いジャンルの作品展示とした。



上：モニターによる動画

下：アートギャラリー



右：アートパネル



販売等は、各団体職員・スタッフで行い、校内スタッフは備品等の準備質問の受付に応じるようにした。



⑤ 設営・物品移動等

オープニング、スポーツ体験、アートパフォーマンスの開始、終了時には椅子、楽器、用具等の備品を含む物品移動は多くのスタッフを用意し、素早い設営を心掛けた。

⑥ 保育（PTAスタッフの子どもの見守り・支援等）

当日のPTAスタッフの子どもの見守りや保育が必要となるため、教職員スタッフ7名が保育を担当した。

⑦ 主な当日スタッフ一覧

担当	延べ人数	担当	延べ人数
体育館進行	3	ボッチャ体験	3
ビデオ撮影（全体1、ライブ2）	5	卓球バレー体験	5
記録	1	フライングディスク体験	3
放送	1	ジャベリックスロー体験	3
各発表	必要数	門出入口（駐車含む）	10
物品移動	多数	近隣駐車場	20
受付・案内・誘導	30	保育	7

3. Specialプロジェクト2020体制整備事業の まとめについて

(1)「くれたけまつり」当日の様子



津軽三味線に合わせて
高等部生徒がソーラン節



和太鼓のリズムで
USAダンス!



地域の方と
楽しくスポーツ



廊下にも教室にも
多数の作品が並びました。



CMソングからジャズの名曲まで。
演奏に合わせて街の風景が現れました。

アート
パフォーマンス



福祉事業所からの
お得なイチ押し商品がいっぱい。

販売



PTA恒例の「わにわにジャングル」
「お菓子つり」も大好評！

遊ぶ

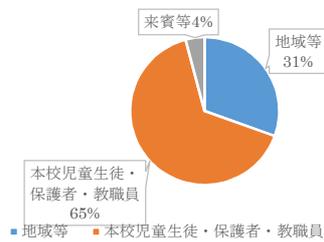
(2)「くれたけまつり」参加者（平成29年度・30年度）

① 参加者の概要

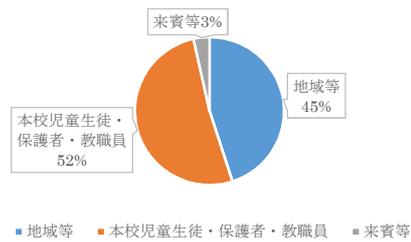
平成29年度、30年度の受付における参加確認は以下のようになった。当日は受付を通らなかった参加者も多数おり、昨年度は400人以上、本年度は500人以上の参加であったと判断した。今年度は地域からの参加者が増えたことがわかる。

	H29年度		H30年度	
	人数	パーセント	人数	パーセント
地域等	118	31%	209	45%
本校児童生徒・保護者・教職員	253	66%	239	62%
来賓等	16	4%	16	3%
合計	387		464	

H29年度 参加者



H30年度 参加者



② 参加者増加の分析

当日参加者が全体として増えた理由は以下のように考えている。

- 他校へのチラシ配布数を10倍にするなど平成29年度3,600枚から平成30年度16,000枚に増やした。
- 平成29年度の実績により、イベント内容がイメージしやすくなった。

(3) 「くれたけまつり」参加者アンケート（平成29年度・30年度）

① アンケート結果

平成29年度19名，平成30年度34名とアンケート回収率が悪かったため，参考としての報告となす。「くれたけまつり」に参加してみてどうでしたか

	楽しかった	楽しくなかった	どちらともいえない
H29年度	18	0	1
H30年度	33	0	1

●よかったものは何ですか。（よかったもの全てに○をつけてください。）

年度	オープンニング	余暇体験サークル	楽器演奏（アートパフォーマンス）	ボッチャ体験	卓球体験	卓球体験	卓球体験	ジャズバリ体験	作品展示	その他	踊りアイヌの
H29年度	18	7	10	3	1	0	0	0	5	2	0
H30年度	12	14	22	5	5	2	2	2	17	7	

●「くれたけまつり」のことをどのように知りましたか。

	ポスター・チラシ	知人から	市民しんぶん	その他
H29年度	12	1	1	5
H30年度	18	10	1	0

●ご意見・ご感想などがあればお書きください。

○活気があっていいですね。来年も来たいです。

○いろんなものを見て楽しかったです。

○娘がわにわにパニック，折り紙を楽しんでいました。

○楽しい雰囲気よかったです。ピアノがとても素敵でした。また来たいです。

○交流のいい機会だと思われる。

○卒業生にあえてうれしかった。

○子どもは折り紙体験や買ったパンが食べられたのがよかったといっています。途中から来たのであまり見られませんが，楽器演奏（アートパフォーマンス）のジャズと三味線のセッションが素晴らしいです。ありがとうございました。

○子どもたちが楽しんでいたことが何より印象的でした。

○とても楽しかったです。

○楽しかったです。

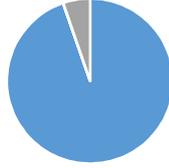
○素晴らしいイベントでした。準備等大変だと思いますが長く続けてください。

○次回も参加したいとおもいました。

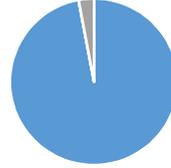
H29年度

H30年度

●「くれたけまつり」に参加してみてどうでしたか

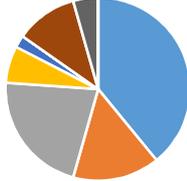


- 楽しかった
- 楽しなかった
- どちらともいえない

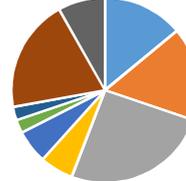


- 楽しかった
- 楽しなかった
- どちらともいえない

●よかったものは何ですか



- オープニング
- 楽器演奏
- 卓球パレー体験
- ジャベリックスロー体験
- その他
- 余暇体験サークル
- ポッチャ体験
- 卓球体験
- 作品展示
- アイヌの踊り

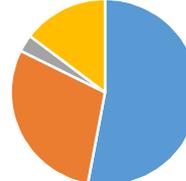


- オープニング
- 楽器演奏
- 卓球パレー体験
- ジャベリックスロー体験
- その他
- 余暇体験サークル
- ポッチャ体験
- フライングディスク体験
- 作品展示
- アイヌの踊り

●「くれたけまつり」のことをどのように知りましたか



- ポスター・チラシを見て
- 知人から
- 市民新聞で
- その他



- ポスター・チラシを見て
- 知人から
- 市民新聞で
- その他

② アンケート結果の分析

●「くれたけまつり」に参加してみてどうでしたか

平成29年度、平成30年度ともに参加者がおおむね満足できる内容であった。

●よかったものは何ですか。(よかったもの全てに○をつけてください。)

平成29年度、平成30年度の「特に良い」と感じた項目は共通しているものの、平成30年度は各項目の数値が平均化してきた。平成29年度はパフォーマンス等の発表やスポーツ体験を体育館のみにしており、販売や展示鑑賞をする時間がオープニング終了時に集中してしまった。平成30年度はその課題を受け、アートパフォーマンスを午前と午後に分け、発表場所も校舎内と体育館に分けたことで、参加者の動きが偏らなかつたことが原因であると考えている。

●「くれたけまつり」のことをどのように知りましたか

平成30年度は「知人から」の項目が大幅に増加した。平成29年度の実績が影響したものと思われる。卒業生の参加も増えたことから、福祉事業所等からの紹介が増えたことも考えられる。

(4) 平成30年度のふりかえりと、今後に向けて

① 取組の重点と成果

平成30年度の取組は、昨年度の「Special プロジェクト2020 体制整備事業推進に関する会議」の意見を受け「広報の充実」と「内容の充実」を重点とした。

「広報の充実」は先述のとおりチラシの配布枚数を大幅に増やした。「内容の充実」は「くれたけまつり」の販売事業所数の増加(平成29年度9事業所から平成30年度13事業所)やアートパフォーマンスで三味線を含めたセッション、プログラムなどの工夫を行った。

数字には直接現れていないが、平成29年度よりも幼児から大人まで楽しめる内容になったように感じている。また、参加者が100名増の500名以上となったのは取組の成果であると考えている。

② 今後は障害者スポーツを通じた地域連携を！

今回のイベント開催の取組は2年間継続したことにより、学校にとって芸術・スポーツ活動の充実を図る上での教育効果があること、総合支援学校への地域理解の輪が広がる可能性があること、障害者芸術や障害者スポーツの啓発の足掛かりとなることなど、大きな成果が見られた。

一方、当日は100名程度のボランティアで運営しており、教職員、PTA、地域の好意で成り立っている。毎年継続するには課題もある。

今後、継続可能な取組を考えた時には、地道で着実な地域連携の活動の必要性も感じている。教育課程内の活動の中で、総合支援学校を特別なものでなく、地域の学校の一つであるという認識を、小・中学校の児童生徒、教員及び保護者により深く根付かせるため、ポッチャ等の障害者スポーツを広げる取組を通して、地域共生の推進に取り組んでいきたい。